

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

## 耐寒ビバーク 2015 IN馬羅尾

長野県の今年の11月の気温は異様に高かったとのことだが、12月に入ってようやく少し冷え込んできて、先日は大町市内でも15センチほどの積雪があった。例年、12月初旬には「耐寒ビバーク」と称して、焚き火とビバーク訓練を実施しているが、この週末それを実行した。去年のこの企画はあまり大きな声で言えないが（と言いながら、こんなところでオープンにしているのか・・・）大雪の中、急遽学校で実施となり校舎建て替えて出てきた廃棄の棚や机などをこれでもかと言うほど燃やした（2014/12/14・528号参照）。そのときの経験者は2年生の男子3人。今回はその3名も含め、部員9名（男子6、女子3）全員が参加した。生徒同士のネットワークで県ヶ丘高校の山岳部4名も一緒になってのにぎやかな合宿となった。今回行った場所は、松川村馬羅尾高原キャンプ場。12月に長野県の標高850mの場所でのビバーク。保護者にも意図を十分伝え、もし万が一天候や体調が悪くなった場合のテントも用意しての実施である。



この日は午前中の補習授業の後、早めの昼食を挟んで月に一回の割合で行っている鷹狩山での体力チェックを実施。午後2時すぎにキャンプ場に到着した。先に来ていた県ヶ丘高校の生徒合流し、早速キャンプ場脇の林の中から倒木を切り出して、薪を集める。ちょうどカラマツの倒木が2本あったので、まずはそれを切りだせと指示。「こっちの木切るから手貸して」「沼にはまった」「おーい手を貸せ」「これじゃ、資材置き場だ」などと、ワイワイ言いながらも、およそ2時間でキャンプ場中央の広場が薪置き場と化した。・・・16:00火焚きを開始。最初に私が火点けの見本を見せる。今日は焚きつけになるカラマツの落ち葉も乾いていて、マッチ2本だけでうまく火を点けることができた。自画自賛だが、顧問の面目躍如！続いて9人を男子2班と女子班の3班に分けてそれぞれに自分たちで火を点けさせる。最初は要領を得ず、なかなかうまくいかないが、小一時間で3つの焚き火が完成した。

12月の日暮れは早い。17時には谷あいのキャンプ場はすでに夜陰が忍び寄り真っ暗である。食事の準備を忘れて焚き火に興じている生徒たちをしり目に密かに私は焼き芋（サツマイモ）を人数分作って、生徒に配給。小腹の空いてきた生徒に大好評。「そろそろ、夕食を作れ」と発破をかける。今日のメニューは「鶏だしうま塩鍋」と「ごはん」だそう。焚き火をしながら班ごとに調理を始める。外での調理も焚き火の前なら寒さ知らず。生徒たちは元気である。18:30、3班それぞれが調理終了。全員で焚き火を囲んでの

食事と相成った。「先生、ごはんできました」の声に、小生は、今度は焼きジャガイモを1個ずつ副菜として提供。バターたっぷりのホクホクしたジャガイモも、これまた生徒から感謝された。ちょっと焦げのあるごはんに、野菜たっぷりの鍋が身体の芯まで沁みわたる。

食事が終わればあとは焚き火を囲んでダベリングだ。少し遅れていた県ヶ丘も食事が終わり、相互に行ったり来たりしながらの交流も始まった。火を焚いているときは、誰言わずとそれぞれがポジションをわきまえて、動き出すから面白い。それぞれの班には特徴があり、女子はマメに火を調節し、3人で木がなくなると、共同作業で薪をつくる。A班は一人焚き火奉行が仕切ってその指示で班員が動く。B班はそれぞれがやりたい放題ながら、全体としてうまく調和している。3班三様、見ているとなかなか面白いが、その結果が朝起きてみると如実に現れていたのには思わず笑った。朝一番大きな火だったのは女子班、A班はそれなりの火で、B班は消えていて、女子の火の回りでちゃっかりあたりこんでいた。夜の更けるのも忘れて火を囲んでいたが、11時「そろそろ寝ろ」という指示を出し、一人一枚ずつブルーシート(100均ショップのペラの180cm四方のもの)を配給。「もし寒かったり、体調が悪かったりしたら、決して無理をせず申し出ること。最初からテントに泊まるのも随意に。ただし朝は6時起床で、7時半出発で雨引山へ行く。」と指示を出した。・・・結局、全員がそのまま朝までテントには入らずツェルトも使わず、寝袋にはいったままブルーシートにくるまって、一夜を明かした。

翌日は雨引山へ合同登山。本当は雪を期待して雪上歩行訓練をと目論んでいたのだが、あてが外れた。雪は頂上直下から僅かにある程度で頂上でも10cmほどだった。しかし、途中の熊倉岩では、正規な登山道を外し、懸垂下降で、岩を直におろさせ、少しスリリングな体験も入れた。曇り空ではあったが、山頂からは大町市や安曇野が望め、いい合宿となった。

冬季合宿はこちらも気合を入れないと実施に踏み切れないが、それ以上に学校の理解、さらには保護者の理解も不可欠だ。しかし、安全第一で段階を踏んでいけば、冬だからこそその楽しさを体験させることができる。その第一弾として、身体がまだ寒さに慣れていない今だからこそできることをしたいというのが今回の目的である。このあと、1月から3月まで、雪の中での楽しさを体験させるための布石は生徒たちには大好評だった。そして、一回り大きくなった生徒たちを見て苦労した甲斐があったとうれしくなった。



心を決めてビバーク体制に



深夜のビバーク地



夜明けのビバーク



懸垂下降

